

セキユリテイの昂進化と境界地域における文化

——米加国境におけるカスカディア地方を事例として——

川久保 文 紀

はじめに

- 1 ボーダースタディーズにおける文化
- 2 境界地域における文化——米加国境のカスカディア地方
おわりに

はじめに

米加国境は、八、八九一キロ（五、五二五マイル）におよぶ国境線を有し、同じ二国間に跨る国境としては世界最長であり、世界で最も安全な国境のひとつと言われてきた。しかしながら、二〇〇一年九月一日の同時多発テロ（以下、9・11テロ）以降、米加国境は、潜在的なテロリズムの脅威などに直面して、これまでの二国間の友好的な歴史を反映したソフトな国境から、多様なセキユリテイ装置が国境線やそれを跨ぐ境界地域に設置されたハードな国境へと変

貌したのである。こうした国境の変容は、国境線を含む境界地域（ボーダーランズ）の生活空間にどのような影響を及ぼしているのであろうか。そして、セキュリティの昂進化が、境界地域における新しい地理的秩序の出現を促していることによって、境界地域における文化は、どのような役割を果たしているのだろうか。本稿では、境界に関わる事象を学際的に分析する視座をもつボーダースタディーズの知見を生かしながら、米加国境において、とりわけ複数の文化やアイデンティティが混在・融合するカスカディア地方（太平洋岸北西部）に焦点を合わせ、安全保障化に対抗しうる境界地域における文化の役割について考察してみたい。

1 ボーダースタディーズにおける文化

(1) 境界地域（ボーダーランズ）とは何か

人間は「境界だらけの世界」に生きており、境界付け（bordering）を不断に行う「地理的存在」である。⁽¹⁾ 空間・場所を境界付ける行為は、人間の活動やその組織にとつて重要な構成要素となってきた。空間が権力の資源となり、人間が場所を作る行為の意味を解明することは、領域性という人間社会それ自体の構成原理を追求する営為である。領域性とは、「人間が個別に、あるいは何らかの社会的、政治的な実体を通じて、地理的な空間を作り出し、伝達し、支配する手段」⁽²⁾であり、領域性の態様は、境界をめぐる諸概念によって表される。それらは、「バウンダリー」などによって表される実際の国境線や標石などの設置による境界画定から、「未開の地（フロンティア）」（ボーダーの一方の側の空間のみ）や「境界地域（ボーダーランズ）」（ボーダーで相対する空間双方を包み込む）に関する定義に至るまで多様で

ある。⁽³⁾

ボーダースタディーズの理論的源流のひとつである政治地理学の概念整理によれば、「フロンティア」とは、「発展パターンが境界に近接することによって明らかに影響を及ぼされる地域」のことである。J・ハウスは、「二重の周辺性 (double peripherality)」という政治的フロンティアの「機能的ダイナミクス」を理解する際の理論的枠組みを提示した。⁽⁴⁾ これは、中心部から離れた地域が、そうした地理的な周辺性に加えて、経済的な地位や権力的な要素へのアクセスという観点から、「二重に」不利な位置に置かれている状態を表す概念である。しかしながら、「フロンティア」概念は、協調・接点という認識よりも、ある領域と他の領域がぶつかり合う分断・隔絶としての境界認識に依拠していると考えられたことから、ボーダースタディーズにおいては、社会的・文化的な相互作用のダイナミズムが生じる「境界地域 (ボーダーランズ)」という概念を援用する傾向が強くなったのである。⁽⁵⁾ 岩下明裕は、空間において境界を考える優位性のひとつに、境界地域という枠組みの共有を挙げ、「国家の中核・周縁、中央・地方関係にも似た対抗関係であるが、その対抗の軸を空間の境界性——国境に近接しているがゆえに独自の空間——という操作を可能とする」と述べている。⁽⁶⁾ この枠組みを援用することによって、空間的な広がりをもつ境界地域の「実務的な課題設定」に対して、ボーダースタディーズという学問領域の中ではやや後発の分野である文化研究という新たな角度から迫ることを可能にしたのである。

また、現代のボーダースタディーズの理論的貢献のひとつには、領域的アイデンティティに関する分析を進展させたことに求められる。領土対立・紛争に関する研究がボーダースタディーズの伝統的なテーマであるとすれば、境界とアイデンティティの相互関係の分析もボーダースタディーズにおける重要なテーマとなった。境界文化の在り方は、

間主観的コミュニケーションの中で発現する「社会的表象」であり、帰属メカニズムとして理解される国家への目的論的紐帯によって、内包か排除かという単純化された還元論的思考から脱却する契機となる。多様な行為実践を伴う境界付けという概念の導入によって、境界が地図上のラインあるいはランドスケープにおける場所というよりも、境界を越える文化を通じて「他者性 (otherness)」との邂逅へと導く関係論的な実践行為として理解されることになるだろう。⁽⁷⁾

(2) 境界地域における文化 (ボーダーランズ・カルチャー)

近年、ボーダースタディーズは、境界という概念を、空間性や社会的実践のプロセスとして認識する傾向を有してきた。⁽⁸⁾ 境界は、富や権力の非対称的な関係とともに進化し、境界付けの実践 (bordering practices) ⁽⁹⁾ が行われる意図や力学を分析の射程に入れながら、社会的構築の産物という性格を持ち合わせてきている。境界を越えた社会的・文化的相互作用によって、政治と経済の摩擦を融和しようとする境界文化の形成は、とくに9・11テロ以後のセキュリティが昂進化する境界地域においては、新しい地理的秩序を形成するひとつの要素になってきたのである。

伝統的な理解における文化とは、「枠組み付けられ、共有された意味やパターン」であるのに対して、境界・国境を跨ぐクロスボーダーな文化は、「ひとつの国家／ひとつの社会」に対応する「ひとつの国民文化」という対概念への疑義をなげかけ、国民文化という境界によって区切られた一国単位的な文化モデルを批判的に理解する。こうした文脈において、R・ロサルドは、「共有された意味やパターン」という伝統的な文化理解に立つのではなく、ある文化内部あるいは複数の文化間の差異が表象される空間としての境界地域 (ボーダーランズ) を、「文化を生産する創

造的な場」として捉えている。⁽¹⁰⁾そして、ボーダースタディーズにおける文化研究に先鞭をつけたV・コンラッドとH・ニコルは、境界地域を「境界の一方の側にいる人間が価値、信仰、感情、および期待を、もう一方の側にいる人間と共有する相互作用の場」と定義し、そこにおいて醸成されるクロス・ボーダーな文化を「境界地域における文化(borderlands culture)」としたのである。⁽¹¹⁾

「境界と文化は、見かけ上は、グローバル化を通じて役割が減じられているが、二一世紀では、双方とも実際ので強固な社会的構築物として再出現してきた。世界大で広がりを見せる境界拡張の帰結のひとつは、相互作用を生み出す境界地域の創出である。：新しい文化地理は境界地域の拡張された移行なのである。この地理が示しているのは、より明確な空間性である。すなわち、境界線がより明確で、フローが切り開かれ、境界線を越える結びつきがより精査され、境界のコミュニティがある時は差異を生じさせ、またある時は、より連携を生み出して(選択的な連携と差異化)。クロス・ボーダーな文化は、セキユリテイの昂進化の時代における新しい秩序を求めているのである。⁽¹²⁾」

一九九〇年代以降、大前研一の「ボーダレスワールド」やT・フリードマンの「フラットな世界」に代表される言説は、国家の衰退と国境の溶融を示唆していたが(脱領域化)、その後の9・11テロ以後の世界の動向は、セキユリテイの昂進化に伴う国境管理の強化に結び付いていった(再領域化)。こうした経済的な境界と政治的な境界のロジックの対立の中で見えてきた研究上の焦点が、境界地域における文化である。ここでは、文化やアイデンティティなど

の社会的な境界がどのように構築されるのかに分析上の焦点を合わせることが、開放性を軸とする経済的な境界と閉鎖性を意味しがちな政治的な境界の二つの対立するロジックを調和することにもつながるのではないかという問題意識につながっている。このような文脈において、境界地域の文化は、「文化を生産する表明以上のものであり、二国間の規制と交流のランドスケープを構築する方法として概念化される」のである⁽¹³⁾。

境界地域に関する統一的な理論は存在しないといつてよいが、H・パウダーも述べているように、社会的構築物としての境界を再構成する際には批判的地理学の視点が必要であろうし、境界の進化に応じてその意味や実践の弁証法を考察する見方が重要になってくる⁽¹⁴⁾。コンラッドとニコルは、9・11テロ以後の米加の境界地域を、国家レベルばかりではなく、ローカルなコミュニティレベルでの多様なステークホルダーが重層的に関与し合う「再創造された境界地域」と名付けている⁽¹⁵⁾。そこには、境界地域を跨ぐ双方の空間における文化の混在・融合やハイブリッドなアイデンティティ形成、境界の近接性と日常的な経験や変化のダイナミズムが相互に影響を与え合う構成要素としての境界文化が醸成されるのである。

「境界文化は、具象化された表明でも、一般的に受け入れられた概念でもないが、境界の意味を記号化し、安全保障、貿易、環境、保健、および他のイシューに関する諸懸念に関する国境の効力を評価するための進化する枠組みなのである。境界文化は、9・11テロ以後の安全な国境と開放的な貿易の回廊の矛盾する価値を映しだし、それに対して抵抗し、矛盾をと きほどくのである。そして境界文化は、こうしたイシューが安全保障、ナシヨナリズム、パトリオティズム、および権力関係に関する我々の定義にとって依然として中心的な課題であることを

確信させる。」⁽¹⁶⁾

2 境界地域における文化―米加国境のカスカディア地方

(1) 米加国境の歴史―9・11テロ以前

本稿の冒頭でも述べたように、米加国境は、二国間の国境としては世界最長であり、大西洋、太平洋、北極海、そして水域国境である五大湖を含めれば、八、八九一キロ（五、五二五マイル）の長さがある。現在の米加国境は、イギリスと、宗主国イギリスからの分離・独立を求めた北米一三諸州との戦争を終結させた一七八三年のパリ条約によって設定された。一七九四年には、アメリカとイギリスとの間で結ばれたジェイ条約によって国境画定委員会が創設され、北緯四九度線に沿って国境が西方に延伸された。歴史的に見て、米加二国間関係は、様々な政策分野において、国家間関係という厳格な枠組みを強固にするというよりも、「機能的協力関係」を形成・発展させてきたといったほうが適切かもしれない。例えば、一九〇九年に設立された「国際協力委員会（IJC）」は、共有する河川や五大湖に関する機能的な連携関係を深め、様々な政策分野において密接なパートナーシップを経験してきたのである。⁽¹⁷⁾

一九九四年に発効した北米自由貿易協定（NAFTA）の締結後、北米地域においては、とくに経済統合の加速化が進み、モノと資本の「継ぎ目のない」流れが促進された。これは、北米地域における経済・貿易関係の転機を成し、それぞれの中央政府が既存の国境内部での規制能力を実質的に喪失しているのではないかと指摘する研究者もいた。⁽¹⁸⁾ NAFTAは、米・国・カナダ・メキシコ三カ国の貿易と投資の拡大を目指し、二〇〇三年にはすべての関税が撤廃さ

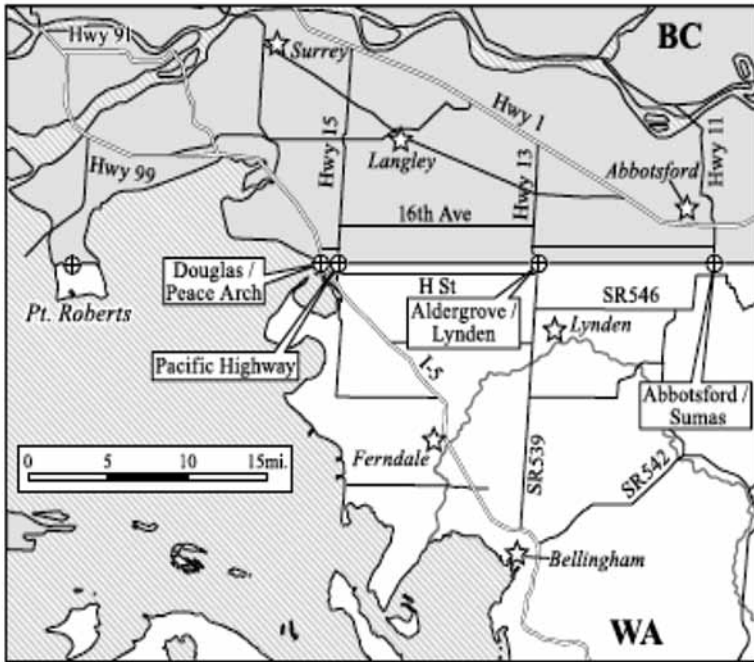
れた。このように、米加の経済・貿易関係の相互依存関係は急速に発展・深化してきた歴史的経緯があるが、9・11テロ以後は、二国間関係のあらゆる側面におけるセキュリティの昂進化が浸潤していった。

(2) 9・11テロ以後のセキュリティの昂進化と境界地域における文化

9・11テロ以後、米加国境は、「世界で最も警備の薄い国境」から「セキュリティの強化された分厚い国境」へと変貌した⁽¹⁹⁾。国境画定委員会によって引かれた国境線と両国の法的管轄権は変わることはないが、国境の安全保障が強化されることによって、国境の空間性や境界地域の在り方をめぐる人間の認識が変化してきているとみることが妥当であろう。これまでは、国境線における「点」として「バラバラに」構成されてきたセキュリティ・ポイントが、連続体としてのセキュリティの強化という観点から、国境線に連なる「ゾーン」や「回廊地帯」へと変容してきているのである⁽²⁰⁾。

9・11テロ以後の北米地域の国境管理に関する政策的方向性は、米国の「ホームランドセキュリティ」に基づく「再境界付け (re-bordering)」であった。米国の国境管理政策がカナダやメキシコのそれに直接的な影響を及ぼすことは言うまでもないが、米加二国間の取決めである「スマートな国境宣言」(二〇〇一年二月)なども、いかに米国への人や物の流れを効率的に管理することに重点が置かれて作成されたものである⁽²¹⁾。「スマートな国境」とは、国境管理に関する制度、メカニズム、言説、実践などの集合体(アッサンブラージュ)のことであり、バイオメトリクスや情報共有などのテクノロジーと連動した国境の空間的拡張を特徴とする。「認識されるリスク脅威」という観点からは、米加・米墨の国境管理に関する二国間関係を政策的に差異化させることは困難であり、北米国境が米国と接する「ひ

図：カスケード・ゲートウェイ（太平洋岸北西部地域）



出所：V. Konrad, Borders and Culture: Zones of Transition, Interaction and Identity in the Canada-United States Borderlands, *Eurasia Border Review*, 5(1), 2014, p. 8.

とつの「国境線に合成されてしまったみること」もできる。⁽²³⁾ しかしながら、米国にとつても、国境線を跨いで空間的領域性を有する境界地域は、位置づけが違う。国境を跨いで社会的・文化的な相互作用が日常的になっている、ローカルなコミュニティレベルも含めた多様なステークホルダーの関与なくしては、境界地域の生活空間は形成されえないのである。

ここでは、セキュリティの昂進化が与えた境界地域における文化の変容について、米加国境、とりわけ太平洋岸北西部地域 (Pacific Northwest)⁽²⁴⁾ を南北に貫くカスケード・ゲートウェイを中心に見ていく (図参照)。このルートは、カナダ側が 99 号線、米国側が I-5 号線で連結しており、米加国境間で物流を始めとした

交通量がもつとも多いルートの一つであり、バンクーバーからシアトルまでの大都市圏を構成している地域である。この境界地域における国境検問所としては、西からダグラス／ピースアーチ、パシフィックハイウェイ、オルダージェローブ／リンデン、アボッツフォード／スマスがあるが、とくに、前二者は、セキュリティの昂進化によって、米国側にある私有地などが政府によって接収され、統合化されたセキュリティ・ゾーンとしての容貌を持つようになった場所である。国境線から離れた米国ワシントン州ブレインやカナダのブリティッシュ・コロンビア州ホワイトロックにおいても、米国国境警備隊の地域事務所や保管施設などが置かれ、地域住民が立ち退きを命じられたりすることもあった。⁽²⁵⁾

そうした国境警備関連のセキュリティ施設の拡張によって、セキュリティが確保された地域とそうでない地域の差別化が、地域住民の分断感情を呼び起こした。⁽²⁶⁾ そして、米国国境警備隊の常駐体制が、米加間の友好のモニュメントであるピースアーチ、および周辺の記念公園の風景も一変させることになり、美しい自然を求めて退職した多くの人間が移り住んでくる海沿いの町ブレインの風景も、セキュリティがあらゆる場所に浸潤することによって変貌してしまったのである。こうした現象は、ブレインばかりではなく、東部のリンデンやスマス、南はベリンハムにまで広がっていることが報告されている。⁽²⁷⁾

9・11テロ以後の米加両国民にとつての国境イメージは、双方とも不安定 (insecure) という言葉で表すことができるかもしれない。米国人にとつてのカナダ国境は、国境警備に対する莫大な投資を注いだとしても、完全な安全など達成できないという「穴の開いた (porous)」国境イメージがつきまとい、カナダ人にとつての米国国境は、日常的な人間の行き来や通商関係が阻害される「分厚い (thick)」国境イメージという、両国民にとつて相反する意味に

において不安定な国境なのである。⁽²⁸⁾二〇〇九年に米国ワシントン州ベルリンハムにある西ワシントン大学国境政策研究所(BPRI)が行った調査によれば、太平洋岸北西部地域に住む約八〇%の米国人と約四〇%のカナダ人が両国の国境は不安定であるという認識を示し、米国人の約三五%およびカナダ人の五〇%以上が、セキュリティの昂進化した「分厚い」国境の構築に反対を表明した。⁽²⁹⁾ここから読み取れるのは、境界地域に住むコミュニティ間で生まれる「信頼の欠損 (Trust deficit)」⁽³⁰⁾という事態であろう。

明らかになっている具体的な事例を挙げておこう。カナダのブリティッシュ・コロンビア州のヌックサック渓谷にあるオランダ系コミュニティには、社会的分断が見られているとされる。国境を越えた日曜礼拝が行われにくくなり、礼拝後にアイスクリームや乳製品などを購入するために、家族で乳製品店に立ち寄ることも、国境を越える予想のつかない待ち時間によって、かなり減少した。⁽³¹⁾また、スポーツ交流の停止、水質管理・野生動物の保護に関する越境的な自然環境保護活動への阻害も報告されている。ラズベリーやブルーベリーを生産・販売している、とくにシーク教徒が中心の東インド系のコミュニティでは、国境を日常的に越えてそうした経済活動を行うことに伴う「人種プロファリング」の影響を受けているともされる。⁽³²⁾

さらには、米加国境の安全保障化に伴う悩ましい問題として、米国のアイデンティティの過剰決定問題が挙げられる。⁽³³⁾西半球渡航イニシアティブ(WHTI)は、西半球内部、とくにカナダやメキシコなどから米国に陸路や海域から入国する際に、パスポートの偽造防止と身分証明を合理化するために9・11テロ以後に導入された。このWHTIの導入とそれに関連する国境管理政策の変更は、境界地域に居住し、複数のアイデンティティを有し、日常的に国境を越えることの多い地域住民にとって、米国のアイデンティティが基軸になってしまうというアイデンティティの過

剩決定問題が提起されたのである。この政策的帰結として、とくに境界地域に居住し、米国との二重国籍を有するカナダ人が、カナダ人であることを明確に証明することに力点が置かれるようになったことは、複数の国家を跨いで社会的ネットワークを継続的に作り上げているトランスナショナルの観点から、問題視されるようになった。⁽³⁴⁾ こうした国境を越える際の検問所での増大する待ち時間や、それに付随する不確実性は、境界地域における米国のアイデンティティの過剩決定が産み出す弊害である。さらには、カスカディア地方においては、国境沿いの無人機による偵察、ブラックホークヘリコプターによる監視、国境線付近に埋設された対人センサー、米国防境警備隊がもつ装備の軍事的相貌などは、境界地域の住民にとっては脅威に映っている。⁽³⁵⁾

カスカディア地方に蔓延しているのは、「不確実性」の抱えるリスクである。国境通過に関する諸規制がたびたび変化することによるビジネスと貿易への影響や、適切な身分証明書類を保持していないことから生じるツーリズムの遅延なども指摘されている。このように、国境機能のすべての側面が「セキュリティ」機能に変換されていること⁽³⁶⁾によって、通勤、ツーリズム、貿易などの他の国境が有する機能が「副次的に」なっているのが現状である。さらに言えば、米墨国境の軍事化の急速な進展が米加国境に与える影響も否定できず、P・アンドレアスは、「米加国境のメキシコ化」が進んでいるとも指摘している。⁽³⁷⁾

おわりに

9・11テロ以降、米国の国境管理政策は、中央政府の組織権限や人員・予算を強化・増大する政策的動向が顕著に

なった。階層的組織構造を有するテクノクラートが基軸となってセキユリテイの確保を企図する国境管理政策は、境界地域における文化や、境界地域を重層的に構成するステークホルダーの役割を軽視して形成・実施されてきた傾向が強い。中央が境界地域におけるローカルなコミュニティレベルの実態を正確に把握した上で、中央と地方の相互のコミュニケーションを促進するような多元的な国境ガバナンスの構築には、トップダウン型とボトムアップ型のバランスのとれた統合型のアプローチが最適であろう。⁽³⁸⁾

そして、本稿で取り上げた米加国境におけるカスカディア地方のセキユリテイの昂進化は、境界地域の生活空間にさまざまな負の影響を与えていることが明らかになったが、社会的・文化的相互作用のゾーンとしての境界地域は、ひとつの国家に対応するひとつの文化ではなく、複数の文化やアイデンティティが混在・融合する固有の空間を形成しており、セキユリテイの昂進化に直面しても、潜勢力としての文化が再生する素地を有している。境界地域における文化は、国境を接する国家間関係の健全さを示すメルクマールの一つとなるが、境界地域における急激な変化を緩和するローカルなステークホルダーの役割を積極的に認識することによって、過度の安全保障化を抑制する契機にもなるであろう。例えば、カスカディア地方における「国際モビリティ回廊プロジェクト（IMTC）」は、米国税関国境警備局（CBP）やカナダ国境サービス庁（CBSA）という国家レベルの組織ばかりではなく、国境通過事業に関わる民間企業や研究機関などを含む多様なステークホルダーが定期的に意見交換し、情報共有を行う境界地域の二国間連合組織であり、境界地域の住民の声を国境管理政策に反映させる上で重要な役割を果たしてきている。⁽³⁹⁾ また、ロッキーマウンテンの真ん中に位置するグレイシャー国立公園（米国・モンタナ州）とウォータートン・レイク国立公園（カナダ・アルバータ州）は、世界で唯一国境に跨る「国際平和と自然公園」を形成し、自然環境の保護やツーリズムの観点から

セキュリティの昂進化を緩和し、境界地域における文化の役割の一端を示している。⁽⁴⁰⁾ このように、境界地域のモビリティとセキュリティを保証する際には、国家レベルのステークホルダーのトップダウン的な関与と、ローカルなステークホルダーのボトムアップ的な関与という国境の機能的接合が同時に必要となってくるであろう。

- (1) アレクサンダー・C・ディーナー／ジョシユア・ヘーガン(川久保文紀訳)『境界から世界を見る―ボーダースタディーズ入門』岩波書店、二〇一五年。
- (2) 同上訳書、六頁。
- (3) 岩下明裕・高木彰彦「ボーダースタディーズへの招待」月刊『地理』古今書院、二〇一六年四月号、七〇頁、および拙稿「ボーダレスな世界とボーダフルな世界―フィルターとしての国境」月刊『地理』古今書院、二〇一六年五月号、七一頁を参照されたい。
- (4) J. House, *Frontier on the Rio Grande: A Political Geography of Development and Social Deprivation*, Oxford: Clarendon press, 1982; idem, "The Frontier Zone: A Conceptual Problem for Policy Makers," *International Political Science Review*, 1 (4), 2000, pp. 456-477.
- (5) 米墨国境の研究で著名なO・マルティネスは、境界地域のタイプとして、(1)疎外された境界地域 (alienated borderlands)、(2)共存する境界地域 (co-existent borderlands)、(3)相互依存の境界地域 (interdependent borderlands)、(4)統合された境界地域 (integrated borderlands) の四つの「連続体」として抽出し、境界のロジックが開放的か閉鎖的かどうかはこの「連続体」における位置関係で示されるとした。また、エスニック集団などのローカルな文化の混在によって形成される米墨の境界地域の多元的な文化構成に関して、「モビリティと革新への受容能力の高い「国際主義的な文化 (internationalist culture)」と名付けた。O. Martinez, *The Dynamics of Border Interaction: New Approaches to border Analysis*, in C. H. Schofield (ed.), *World Boundaries Vol I : Global Boundaries*, London: Routledge, 1994, pp. 1-15; idem, *Border People: Life and Society in the U.S.-Mexico Borderlands*, Tucson: University of Arizona Press, 1994.
- (6) 岩下明裕『入門 国境学―領土、主権、イデオロギー』中公新書、二〇一六年、五一頁。

- (7) N. Soguk, *Border's Capture: Insurrectional Politics, Border Crossing Humans and the Political* in P. K. Rajaram and C. Grundy-Warr. (eds.), *Borderscapes: Hidden Geographies and Politics at Territory's Edges*, 2006. Minneapolis: University of Minnesota Press, p. 286.
- (8) R. Shields, *Boundary Thinking in Theories of the Present: The Virtuality of Reflexive Modernization*, *European Journal of Social Theory*, 9(2), 2006, p. 225.
- (9) J. Agnew, *Borders on the mind: re-framing border thinking*, *Ethics & Global Politics*, Vol.1, No.4, 2008, p. 184.
- (10) R. Rosaldo, *Culture and Truth: The Re-Making of Social Analysis*, Boston: Beacon, 1993, pp. 27-28. (雑谷美智記『文化と真実—社会分析の再構築』日本エッセイスト・クラブ出版部 一九九八年 三〇九頁) ; V. Konrad, *Conflating Imagination, Identity, and Affinity in the Social Construction of Borderlands Culture Between Canada and the United States*, *American Review of Canadian Studies*, 42(4), 2012, p. 534.
- (11) V. Konrad and H. N. Nicol, *Beyond Walls: Re-inventing the Canada-United States Borderlands*, Ashgate, 2008.
- (12) V. Konrad, *Borders and Culture: Zones of Transition, Interaction and Identity in the Canada-United States Borderlands*, *Eurasia Border Review*, 5(1), 2014, p. 45.
- (13) V. Konrad, *Conflating Imagination*, op. cit., p. 532.
- (14) H. Bauder, *Toward a Critical Geography of the Border: Engaging the Dialectic of Practice and Meaning*, *Annals of the Association of American Geographers*, 101(5), 2011.
- (15) V. Konrad and H. N. Nicol, *Beyond Walls*, op. cit., pp. 54-55.
- (16) *Ibid.*, p. 292.
- (17) エマニュエル・ブルネイ＝ジェイ (川久保文紀監訳) 「9・11同時多発テロ以降のカナダ＝米国情境—カナダ側からの見解」『境界研究』No.2, 二〇一一年, 一二四—一二五頁。
- (18) 同上, 一一九—一二二頁。
- (19) J. Ackleson, *From "Thin" to "Thick" (and Back Again?) : The Politics and Policies of the Contemporary US-Canada Border*, *American Review of Canadian Studies*, 39(4), pp. 336-351.

- (20) V. Konrad, *Borders, Bordered Lands and Borderlands: Geographical States of Insecurity between Canada and the United States and the Impacts of Security Primacy*, in E. A. Vallet (ed.), *Borders, Fences, and Walls: State of Insecurity?* Ashgate, pp. 88–89.
- (21) 正式名称は「以上の通り。Building a Smart Border for the 21st Century on the Foundation of a North American Zone of Confidence. 二〇〇五年三月には、米加墨間での「北米の安全保障と繁栄のためのパートナーシップ協定 (Secure and Prosperity Partnership of North America)」が締結された。
- (22) K. Cote-Boucher, *The Diffuse Border: Intelligence-sharing, Control and Confinement along Canada's Smart Border*, *Surveillance & Society*, 5(2), p. 144.
- (23) V. Konrad, *Conflating Imagination*, op. cit., p. 540.
- (24) カスカディア地方とは、一般的にはカスカディア山脈の周囲にある地方全体を意味するが、広義には、米国のワシントン州、オレゴン州、アイダホ州、モンタナ州、アラスカ州の五つの州と、カナダ側はブリティッシュ・コロンビア州とユーコン準州を含む地域を指している。
- (25) V. Konrad, *Borders and Culture*, op. cit., pp. 47–48.
- (26) *Ibid.*, pp. 55–56.
- (27) Konrad, *Borders, Bordered Lands and Borderlands*, op. cit., p. 90.
- (28) *Ibid.*, p. 93.
- (29) V. Konrad, *Breaking Points' But No 'Broken Border': Stakeholders Evaluate Border Issues in the Pacific Northwest Region*, *Border Research Policy Institute Report* 10, Western Washington University: BPR1, 2010; idem, *Borders and Culture*, op. cit., p. 49.
- (30) Konrad, *Borders and Culture*, op. cit., p. 49.
- (31) *Ibid.*, p. 50.
- (32) *Ibid.*, p. 50.
- (33) *Ibid.*, p. 53, p. 54. 本稿では直接の分析対象とはしていないが、先住民族の問題も、多元的なアイデンティティの文脈にお

いて社会的帰属の問題を考察する上で重要である。国民としての「同質性」と、先住民族としての「先住性」が交錯する境界地域において、文化的アイデンティティをどのように維持・発展させていくのかは、米加国境の再境界付けを歴史的に理解する上で避けては通れない問題である。例えば、米国・ニューヨーク州マシーナとカナダ・オンタリオ州コーンウォールを跨ぐ境界地域に居住するモホーク族は、自由通行権が認められ、独自の文化圏を形成している。

- (34) Konrad, *Conflating Imagination*, op. cit., p. 542.
- (35) Konrad, *Borders, Bordered Lands and Borderlands*, p. 93, pp. 96-97. なお、セキュリティの昂進化が、カスケード・ゲートウェイの東部にあるカスカディア山脈周辺の境界地域における環境に与える影響も懸念されている。この地域は、ハイイログマなどの絶滅危惧種の生息地域とも重なり、国家や州による環境保護のための規制が強い地域であるが、こうした環境規制の緩和や撤廃が、米国国境警備隊の円滑な活動遂行のために妨げになっているとの理由から、共和党の議員を中心に叫ばれるようになった。カスカディア地方の自然環境保護に関心をもつ住民は、セキュリティの昂進化が、共通の価値である環境保護に対して、多様なステークホルダー間の国境を越えた連携を困難にしていると感じている。しかしながら、カスカディア地方における大気保全、アボッツフォード地域全体に影響を及ぼすスツクサック川の洪水対策、スマス帯水層の保護に関する越境協力は、一定の進展を見てきているとされる。
- (36) Konrad, *Conflating Imagination*, op. cit., p. 541.
- (37) P. Andreas, *A Tale of Two Borders: The US-Canada and the US-Mexico Lines after 9/11*, in P. Andreas and T. J. Biersteker (eds.), *The Rebordering of North America*, New York: Routledge, 2003.
- (38) Konrad, *Borders, Bordered Lands and Borderlands*, pp. 99-100.
- (39) Konrad, *Borders and Culture*, op. cit., p. 56.
- (40) *Ibid.*, p. 56.

参考文献

* Agnew, J., *Borders on the mind: re-framing border thinking*, *Ethics and Global Politics*, 1(4), 2008.

* Bauder, H., *Toward a critical geography of the Border: Engaging the Dialectic of Practice and Meaning*, *Annals of the*

セキュリティの昂進化と境界地域における文化(川久保)

Association of American Geographers, 2011.

- * Brunet-Jailly, E., Theorizing Borders: An Interdisciplinary Perspective, *Geopolitics*, 10, 2005.
- * Diener, A. C., and J. Hagen, Theorizing Borders in a 'Borderless World': Globalization, Territory and Identity, *Geography Compass*, 3/3, 2009.
- * Kolossov, V., Border Studies: changing perspectives and theoretical approaches, *Geopolitics*, 10(4), 2005.
- * Konrad, V., and H. N. Nicol, *Beyond Walls: Reinventing the Canada-United States Borderlands*, Farnham: Ashgate, 2008.
- * Konrad, V., Conflating Imagination, Identity, and Affinity in the Social Construction of Borderlands Culture Between Canada and the United States, *American review of Canadian Studies*, 42(4), 2012.
- * Konrad, V., Borders and Culture: Zones of Transition, Interaction and Identity in the Canada-United States Borderlands, *Eurasia Border Review*, 5(1), 2014.
- * Newman, D., The lines that continue to separate us: borders in our 'borderless' world, *The Progress in Human Geography*, 30(2), 2006.
- * Rumpford, C., Towards a Multiperspectival Study of Borders, *Geopolitics*, 17, 2012.
- * Prokkola, Eeva-Kaisa, Unfixing Borderland Identity: Border Performances and Narratives in the Construction of Self, *Journal of Borderlands Studies*, 24(3), 2009.
- * Vallet, E., (ed.), *Borders, Fences, and Walls: State of Insecurity*, Farnham: Ashgate, 2014.
- * Van Houtum H., and A. Struwer, Borders, Strangers, Doors and Bridges, *Space and Polity*, 6(2), 2002.
- * 岩下明裕「入門 国境学―領土、主権、イデオロギー」中公新書、二〇一六年。
- * 岩下明裕・高木彰彦「ボーダースタディーズへの招待」月刊『地理』古今書院、二〇一六年四月号。
- * 川久保文紀「北米国境のテクノロジ化」日本国際政治学会『国際政治』一七九号、二〇一五年。
- * 川久保文紀「ボーダーレスな世界とボーダーフルな世界―フィルターとしての国境」月刊『地理』古今書院、二〇一六年五月号。
- * 上智大学アメリカ・カナダ研究所編「北米研究入門―「ナショナル」を問い直す」上智大学出版、二〇一五年。
- * エマニユエル・ブルネイ＝ジェイ（川久保文紀監訳）「9・11同時多発テロ以降のカナダ―米国国境―カナダからの見解」『境

界研究』N.2、二〇一一年。

*アレクサンダー・C・ディーナー／ジョシユア・ヘーガン（川久保文紀訳）『境界から世界を見る―ボーダースタディーズ入門』

岩波書店、二〇一五年。

*レナート・ロサルド（椎名美智訳）『文化と真実―社会分析の再構築』日本エディタースクール出版部、一九九八年。

〔付記〕

本稿は、二〇一六年度日本国際文化学会第一五回全国大会（於：早稲田大学）における共通論題「ボーダースタディーズにおけるカルチュラルな境界」で報告したペーパーに加筆・修正を加えたものである。なお、本稿は、科学研究費助成事業基盤研究（A）「ボーダースタディーズにおける国際関係研究の再構築」（研究代表：岩下明裕北海道大学教授）の研究成果の一部である。筆者は、二〇一四年二月初め、本稿で取り上げたカスケード・ゲートウェイをカナダ・バンクーバーから車で南下し、米国ワシントン州ベリンハムにある西ワシントン大学国境政策研究所（Border Research Policy Institute：BRPI）を訪問し、米加間の国境安全保障を調査した。

（中央学院大学法学部准教授）